

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第6集

とうぜんじ くろやま
東禅寺・黒山遺跡Ⅲ

—平成9年度南若川治水緑地建設事業に伴う発掘調査報告—

1998

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



遺跡上空から西方を望む

序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した南若川治水緑地建設事業に係る東禅寺・黒山遺跡の3年次の発掘調査の記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた創造をするために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今、私たちに与えられた課題であるといえます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、南若川治水緑地建設事業に先立ち関係諸機関と協議・調整を重ねて参りましたが、当事業によって失われる範囲について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古代から中世にかけての集落跡を発見しました。特に、瓦質土器鍋や青磁・白磁などの廃棄された溝や完形の土師器皿を多数出土した柱穴、あるいは、香炉や火鉢の出土などは、近くの上辻遺跡、鑄銭司大蔵・今宿西遺跡など中世の遺跡との関連が考えられ、注目されるものです。これらの資料は当時の人々のくらしを考える上できわめて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

終わりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 上野 孝明

例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団が、平成9年度に実施した東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鑄銭司字大円）の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、財団法人山口県教育財団が山口県山口市土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

調査担当 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター指導主事 大石 学
大野真司

4. 出土遺物のうち石製品の石材鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏からご教示を得た。なお石材鑑定は表面観察によるものである。

5. 調査にあたっては、山口県山口市土木建築事務所、山口市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

6. 調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。

7. 本書の第2図は、国土地理院発行5万分の1地形図「小郡」を使用した。

第3図は山口県山口市土木建築事務所提供のものである。

8. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。

9. 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。

農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帖」

10. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

11. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、白塗は土師器・土師質土器・瓦質土器を表す。

また、内外面の濃い網掛けは黒色土器を表す。

12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB:掘立柱建物跡 SK:土坑 ST:墓 SP:柱穴 SD:溝・溝状遺構

13. 本書の作成・執筆は、大野・大石が分担作成し、大石が編集した。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 遺 構	9
(1) 掘立柱建物跡	
(2) 土坑	
(3) 溝・溝状遺構	
IV 遺 物	16
V ま と め	22

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1	第10図	S K03・04・16実測図	13
第2図	遺跡周辺図	2	第11図	S K09・10・14実測図	14
第3図	調査区設定図	4	第12図	S K11実測図	15
第4図	遺構配置図	5・6	第13図	遺物実測図(1)	16
第5図	第V地区遺構配置図	7・8	第14図	遺物実測図(2)	17
第6図	S B04・11実測図	9	第15図	遺物実測図(3)	18
第7図	S B17・20実測図	10	第16図	遺物実測図(4)	19
第8図	S B21実測図	11	第17図	遺物実測図(5)	20
第9図	S K08・S T01実測図	12	第18図	遺物実測図(6)	21

図 版 目 次

巻頭図版 遺跡上空から西方を望む

図版1 調査区遠景 調査区西側

図版2 遺跡上空から西を望む 調査区東側

図版3 S T01出土状況 S T01

図版4 S K08出土状況 S K16出土状況

図版5 S K14出土状況 S K11出土状況

図版6 S P02・77・05・04・59・49・57・37土器出土状況

図版7 S K08出土遺物 S K出土遺物 S K・S D出土遺物

図版8 S D出土遺物 S P出土遺物

図版9 S P出土遺物

図版10 S P出土遺物 その他の出土遺物

表 目 次

第1表	掘立柱建物一覧表	11
-----	----------	----

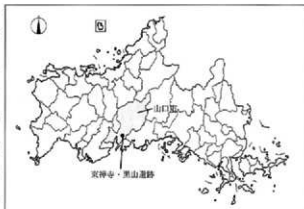
I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

東禪寺・黒山遺跡は、山口県山口市の南部の鑄銭司に位置する。鑄銭司は、北から東にかけては黒河内山（標高424.4m）をはじめとする山口山地、南は秋穂山地と三方を山地に囲まれた小郡低地にある。本遺跡は、その小郡低地の中の谷底平野および氾濫源に立地する。本遺跡の西側には金毛川が流れ、南若川に合流している。この川は大雨の度に氾濫し、周辺地域一帯に被害を及ぼしてきた。北部には山陽新幹線と山陽自動車道が横断し、中央南寄りではJR山陽本線と国道2号が東西に走っており、現在も物流の幹線道に面した交通の要衝の地を占めている。

2 歴史的環境

遺跡の西側には、金毛川をはさんで周防鑄銭司跡が位置している。「周防鑄銭司」は、天長二年（825）に設置された平安期の官営鑄銭所である。約200年間にわたって存続し、皇朝十二銭のうち「豊寿神宝」から最後の「乾元大宝」までの8種類の銅銭を鑄造していた。さらに、西方の山麓一帯には、古代の大規模な須恵器の窯跡群があり、そのうちの1つ陶窯跡は国史跡に指定されている。この「陶窯跡」は、陶地区向田の標高80mの丘陵の傾斜地に位置する。山田窯跡とも呼ばれ、周辺には4カ所以上の須恵器の窯跡群が知られている。これらの窯がこの地に作られたのは、近くに良質の陶土（台道土）があり、水、燃料（松材）に恵まれたことと、陸路や海路が便利であったことが挙げられる。南方の「大村」には、山陽道周防国八駅の一つである八千駅（やちのえき）があったとされている。中世以降、駅が東方の「今宿」の方へ移っていったのではないかと考えられている。ちなみに古代の官道の中で最重要路線であった山陽道は、本遺跡の南側現在の国道2号辺りを通っていたのではないかと考えられる。中世の海運に



第1図 遺跡の位置



陶ヶ岳より遺跡を望む

ついてみてみると小郡湾に面した「深溝」は、中世には大内氏の本拠地山口をひかえた港として栄えた。室町時代の遣明使節・勘合船に関する記録に深溝所屬の船のことが記載されている。当時は海が深く湾入し、大陸貿易に適した大型船が置かれるほどの港であったようである。さらに、樺野川河口に開けた「東津」の港も中世から近世にかけて公私船舶の出入りが多く、記録などから東大寺への貢ぎ物もここから輸送されたことが分かっている。小郡は、山口の外港としてだけでなく、山陽道の宿駅として発達した町である。このように中世～近世には当地の一带は海上交通の要衝にあっていた。その背景として、中世末から近世初期の推定海岸線を見ると現在より随分湾入しており、周防鋳銭司との関係から四辻あたりは銭貨の積み出しに便利な港になりうる地形であったと考えられる。

現在では本遺跡周辺は大雨の度に洪水にみまわれ、周辺の人々が被害を被ることが多い。しかし、古代から中世にかけては、周防鋳銭司が金毛川を隔てたところに置かれ、200年間も続いたことや、海に近かったことなどから考えると、現代のように大雨の度に川が氾濫し洪水に見舞われるというようなことは少なかったのではないかとと思われる。むしろ、陸路・海路ともに発達し、交通の要衝の地の利に恵まれて、遺跡周辺において多くの人々が生活を営む基盤が整っていたのではないかと考えられる。

参考文献	山口市教育委員会	『周防鋳銭司跡』	1978年
	下中邦彦	日本歴史地名大系「山口県の地名」	1980年 平凡社
	山口県教育委員会	山陽道	1983年
	竹内理三	角田日本地名大辞典「山口県」	1988年 角川書店



第2図 遺跡周辺図

Ⅱ 調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡の位置する鑄銭司地区は、金毛川、高橋川などの小河水が南若川に合流する地域にある。この地域は、7～8mと標高が低いため、度々大雨による洪水にみまわれてきた。そこで、県はこの水害の対処のため、遊水池を建設する南若川治水緑地建設事業を計画した。

鑄銭司地区には、国指定史跡「周防鑄銭司跡」を始め、多くの遺跡が確認されているため、治水緑地建設予定区域にも遺跡の埋存する可能性が予想された。そこで、山口県土木建築事務所から調査依頼を受けた山口県教育委員会は、平成6年、計画地区内の予備調査を行った。その結果、土坑や柱穴などの遺構や、土師器・磁器などの遺物が検出されたため、事前の発掘調査を実施することとなった。対象面積が18,000㎡と広大なため用地取得が完了した地区を対象に年次的な継続調査とし、財団法人山口県教育財団が山口土木建築事務所から受託し実施することとなった。

調査初年である平成7年度は、工事区域北東部を調査対象地とし、発掘調査を実施した。調査面積は約3,500㎡で、平安時代から近世にかけての集落跡が確認された。8年度は、工事区域の中央部、面積約2,000㎡を発掘調査し、平安から中世にかけての集落跡が確認された。3年次にあたる本年度の調査は、工事区域西北部約2,200㎡を調査対象とし、調査区をV地区とし調査を実施した。

平成9年4月28日、現地における地権者等関係諸機関の打ち合わせを行った後、5月6日から調査を開始した。調査に当たっては、廃土場を確保する関係から、調査区を2分割し、西半分から着手することとした。まずはじめに、対象地区に8本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、調査区全域にわたり遺構が認められた。

5月16日、重機による表土除去が開始された。今年度の調査も、例年同様水に悩まされることとなった。周囲の水田から流れ込む水とともに、遺構面が用水路の水位よりも低いこともあって、調査区は水に浸ることがあった。しかし、過去2年間の経験から調査区の周囲に溝を巡らせ、水中ポンプを使い常時排水することで、辛うじて遺構面を乾いた状態に保つことができ、検出作業を続けた。検出の結果、多数の柱穴群や土坑・溝などが確認された。遺構検出後、調査区の平板測量を行い、遺構配置図を作成し、遺構の掘り込みに備えた。

5月28日、掘り込みを開始した。まず、調査区北西部から始めたが、田植えの時期と重なり、地表は乾いていても掘り込むにつれて水が湧いてくるという状況のため作業は難航した。同時に田植えの最盛期ということで作業員の確保が難しく、さらに困難を究めた。作業中、いくつかの遺構からおび



表土除去



作業風景

ただし量の瓦質土器、土師器・磁器等中世の遺物を検出した。掘り込みの完了したそれぞれの遺構は、随時、写真撮影を行い実測を進めていった。

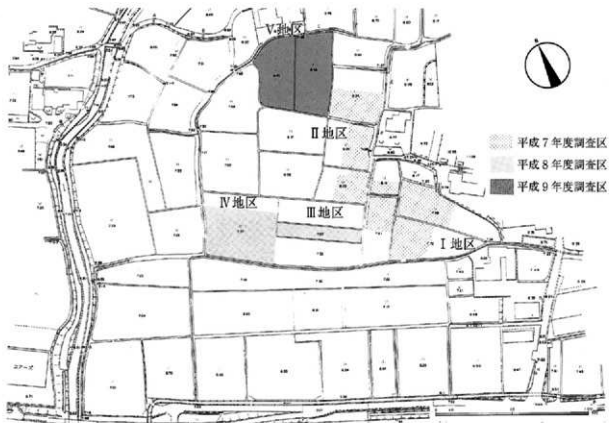
6月19日、天候を考慮し調査区西半分の空中写真を撮影した。その後、天候にも左右され調査が停滞したが、7月16日、前期の調査は終了した。

7月17日、調査区東半分の表土除去を開始した。梅雨の雨を含んだ廃土は重く、ぬかるみで重機のキャタピラは滑り、作業は手間取った。

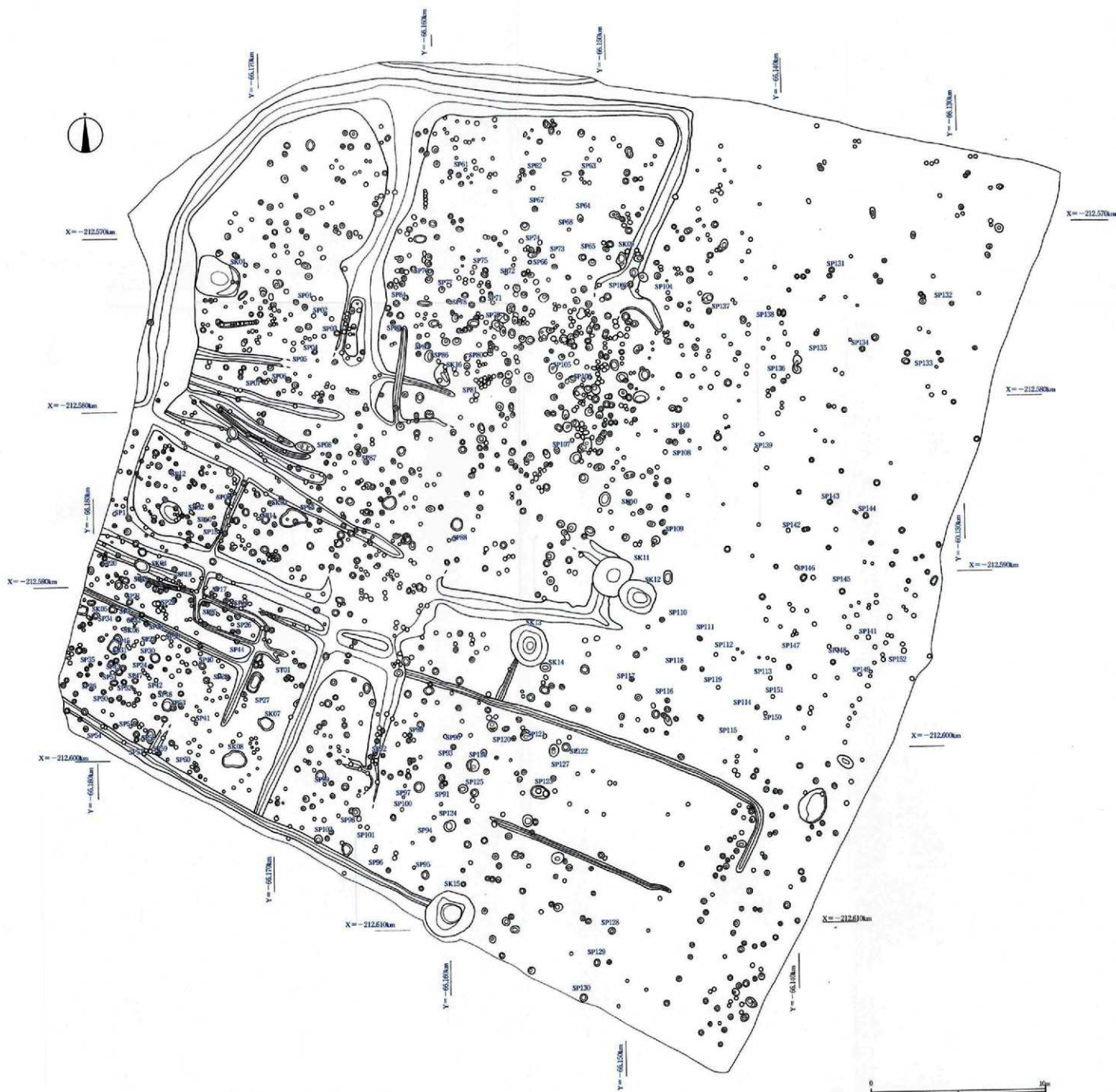
7月29日、掘り込みを開始した。地表は乾いていても掘り込むにつれて、水が湧いてくる状況は前期と同じであった。遺構検出では、いくつかの柱穴からおびただしい数の土師器皿が出土した。

8月26日、調査区東半分の空中写真を撮影。同30日、発掘調査の成果を地元の人々に知らせるため、現地説明会を開催した。たくさんの熱心な見学者の参加を得て、当時の人々の生活の一端を垣間みてもらうことができた。

9月17日、調査区を前期、後期の2分割で実施した現地における全ての調査を終了した。その後、県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施して、この報告書の刊行に至った。



第3図 調査区設定図



第4圖 遺構配置圖



第5图 第V地区遺構配置図

III 遺 構

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡22棟、土坑16基、溝・溝状遺構12条、柱穴2,323個である。遺構は調査区全域に広がっているが、溝・溝状遺構は調査区西側に多く検出された。また、素掘りの井戸が3基検出されたが、調査区中央の南側に集中している。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくない。

(1) 掘立柱建物跡

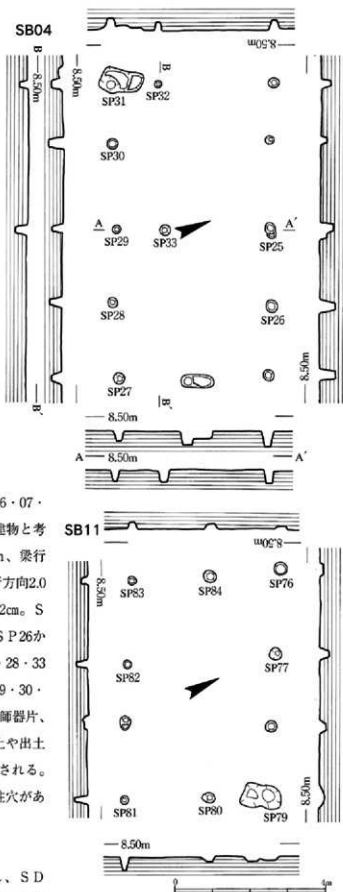
今年度の調査では、掘立柱建物が22棟復元できた(第5図 第1表)。規模別にみると3間×2間のものが最も多く、続いて2間×2間、2間×1間の順になっている。調査区西側では、溝・溝状遺構が多く、溝と関係すると思われる掘立柱建物が半数近くある。また、棟方向をみると、ほとんどが現在の畦畔に沿って建っている。

S B O 4 (第6図)

S B O 4は、調査区南側に位置し、S D 03・06・07・10の溝状遺構に囲まれている。4間×2間の建物と考えられる。棟方向は、N69° W、桁行長7.6m、梁行長4.0m。柱間の平均は、桁行方向1.9m、梁行方向2.0m。柱穴の規模は、直径20~36cm、深さ3~42cm。S P 25からは、土師器片、瓦質土器鍋が出土。S P 26からは、土師器碗、瓦質土器片が出土。S P 27・28・33からは、土師器片、瓦質土器片が出土。S P 29・30・32からは、土師器片が出土。S P 31からは、土師器片、瓦質土器片、青磁片、白磁片などが出土。埋土や出土遺物から、この建物は室町時代のもものと推定される。また、削平を受けたためか規模のわりに浅い柱穴がある。

S B 11 (第6図)

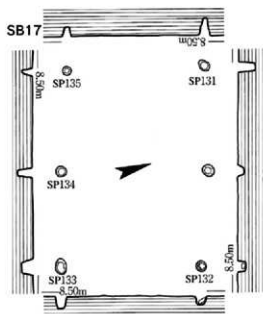
S B 11は、調査区中央やや北寄りに位置し、S D 02・02-A・02-A'の溝に囲まれている。3間×2間



第6図 S B O 4・11実測図

の建物と考えられる。棟方向は $N66^{\circ}W$ 、桁行長5.8m、梁行長4.0m。柱間の平均は、桁行方向1.9m、梁行方向2.0m。柱穴の規模は、直径16～42cm、深さ4～37cm。S P 76・77・78・80からは、土師器片が出土。S P 79からは、土師器片、瓦質土器鍋が出土。S P 81からは、土師器片、瓦質土器片が出土。S P 82からは、土師器碗(86)が出土。S P 84からは、土師器碗が出土。埋土や出土遺物から、この建物は室町時代のもので推定される。また、削平を受けたためか規模のわりに浅い柱穴がある。

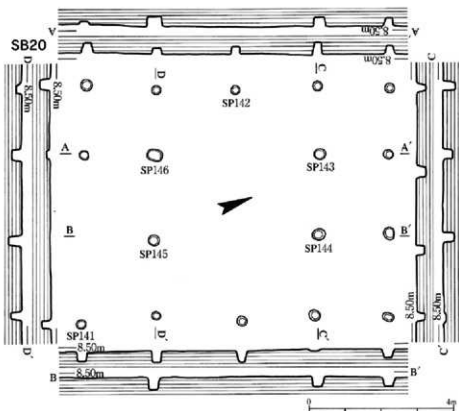
SB 17 (第7図)



SB 17は、調査区東側に位置する。2間×1間の建物と考えられる。棟方向は $N74^{\circ}W$ 、桁行長5.4m、梁行長3.9m。柱間の平均は、桁行方向2.7m、梁行方向3.9m。柱穴の規模は、直径22～42cm、深さ16～49cm。S P 131・132・134からは、土師器片が出土。S P 133からは、土師器片、須恵器片が出土。S P 135からは、土師器片、瓦質土器片が出土。埋土や出土遺物から、この建物は室町時代のもので推定される。

SB 20 (第7図)

SB 20は、調査区東側に位置する。4間×3間の建物と考えられる。棟方向は $N21^{\circ}E$ 、桁行長8.4m、梁行

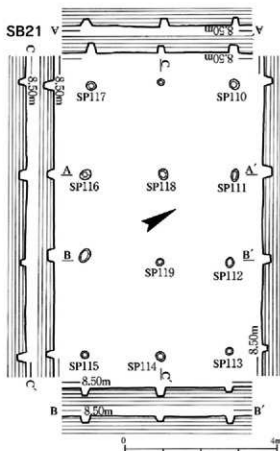


第7図 SB 17・20実測図

長6.3m。柱間の平均は、桁行方向2.1m、梁行方向2.1m。柱穴の規模は、直径24~32cm、深さ5~30cm。SP141・143・145からは、土師器片が出土。SP144からは、土師器片、緑釉陶器片が出土。SP146からは、土師器片、瓦質土器片が出土。埋土や出土遺物から、この建物は室町時代のもものと推定される。

SB21 (第8図)

SB21は、調査区東側に位置する。3間×2間の建物と考えられる。棟方向は、N61°W、桁行長7.1m、梁行長3.8m。柱間の平均は、桁行方向2.3m、梁行方向1.9m。柱穴の規模は、直径18~34cm、深さ13~26cm。SP111・112・113・114・115・117・118・119からは、土師器片が出土。SP116からは、土師器片、須恵器片が出土。埋土や出土遺物から、この建物は室町時代のもものと推定される。



第8図 SB21実測図

第1表 掘立柱建物一覧表

建物番号	規模 (間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時期
			桁 行	梁 行		
			建物の隅から (m)	建物の隅から (m)		
01	2×1+a	N21° E	4.2(2.1・2.1)	1.9	須恵器、土師器、瓦質土器	室町
02	2×2	N25° E	4.1(2.2・1.9)	3.8(2.0・1.8)	土師器	室町
03	3×1	N60° W	4.0(2.1・1.9)	3.0	土師器、瓦質土器、陶器	室町
04	4×2	N69° W	7.6(1.8・2.0・2.3・1.5)	4.0(2.2・1.8)	土師器碗、瓦質土器鍋等	室町
05	2+a×2	N60° W	4.1+a(2.4・1.7・a)	4.4(2.0・2.4)	土師器碗・皿、瓦質土器等	室町
06	1+a×2	不明	不明	4.2(2.0・2.2)	瓦質土器	室町
07	3×1	N56° W	5.8(1.7・2.7・1.4)	3.0	土師器、瓦質土器鍋	室町
08	2×1+a	N64° W	4.0(2.1・1.9)	1.8(1.8・a)	須恵器、土師器、瓦質土器	室町
09	3×2	N90° W	6.8(2.0・2.1・2.7)	4.8(2.3・2.5)	土師器、瓦質土器鍋、白磁等	室町
10	3×2	N26° E	5.8(1.8・2.0・2.0)	3.9(2.0・1.9)	土師器、瓦質土器	室町
11	3×2	N66° W	5.8(2.2・1.7・1.9)	4.0(2.1・1.9)	土師器碗、瓦質土器鍋	室町
12	2×2	N74° W	4.1(1.7・2.4)	2.2(1.1・1.1)	弥生式土器、土師器等	室町
13	3×3	N83° W	6.2(2.0・2.0・2.2)	6.1(2.0・2.0・2.1)	土師器、瓦質土器鍋、青磁等	室町
14	3×2	N85° W	4.8(1.6・1.6・1.6)	3.6(2.2・1.4)	土師器、瓦質土器、白磁	室町
15	3×2	N27° E	6.2(2.1・1.6・2.5)	4.1(2.1・2.0)	土師器皿、瓦質土器、白磁等	室町
16	3×2+a	N65° W	5.7(1.9・2.0・1.8)	4.1(2.0・2.1)	須恵器、土師器、瓦質土器	室町
17	2×1	N74° W	5.4(2.8・2.6)	3.9	須恵器、土師器	室町
18	2×1	N75° W	7.0(2.6・4.4)	3.9	土師器	室町
19	2×2	N15° E	7.1(3.8・3.3)	4.4(2.1・2.3)	須恵器、土師器、青磁等	室町
20	4×3	N21° E	8.4(2.0・2.3・2.1・2.0)	6.3(1.8・2.2・2.3)	土師器、瓦質土器、緑釉陶器	室町
21	3×2	N61° W	7.1(2.5・2.2・2.4)	3.8(1.9・1.9)	土師器	中世
22	2×1	N23° E	4.9(2.4・2.5)	4.9	土師器皿、瓦質土器	室町

(2) 土坑

今回のV地区の調査では、土坑、土坑墓、井戸を合わせて、16基が検出された。これは、平成8・9年度の結果と比べると検出数が少ない。残存する土坑の規模も小さく深さも一部井戸を除けば10cm程度と浅い。もともと標高が低く(7~8m)、同一面に古代から中世にかけての遺構面が検出されたことから、古代の遺構は中世の遺構により切れ、さらに毛利氏の防長二カ国への移封にともなう水田開発のため中世の遺構も削平を受けたものと思われる。調査区からは近世と比定できる遺構、遺物は検出されなかった。近世に水田化されそのまま現在に至った現状を示すものと見られる。以下今回の調査で中心となる中世の土坑について特徴のあるものを取り上げ記述していく。

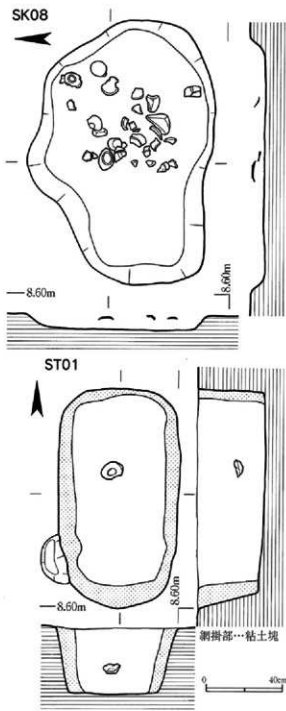
SK08 (第9図 図版4)

この土坑はV地区南側SB04の南側に位置する。長軸100cm、短軸65cmの不整形円形。深さは、10cm。側面から内側に緩やかに掘りこまれて側壁と底面の境が不明瞭であるが、底面は平坦。埋土は、灰褐色土の単一層。出土遺物は、土師器皿(1~9)、椀、瓦質土器片。出土遺物から室町時代の土坑と推定される。SB04に関係のある土坑か。土坑の使用目的は、廃棄坑か。

ST01 (第9図 図版3)

この土坑は、V地区南側SB07の北側に位置する中世の土坑墓である。墓坑の形態は、南北に長軸120cm、東西に短軸70cmの隅丸長方形。深さは40cm、側壁が垂直に掘りこまれ底面が広く平坦。側壁には、厚さ7cmの粘土が四周にもちいられている。粘土の一部に熱を受けた痕跡があり、粘土は焼きしめられて堅い。底部には米粒大の骨片が多数出土。また炭も出土。粘土が熱を受けていること、炭が検出されていることから火葬墓の可能性が高い。また、屋敷地の一面に位置しており、墓坑の規模が小さいことなどから、被葬者が未成年者であった可能性も推定されよう。出土遺物は、完形の土師器皿(12)が一枚のみ出土。刀子や銭、鉄釘などの出土はなかった。出土遺物から室町時代に属するものと考えられる。

類例としては、防府市下右田遺跡に屋敷地内に墓(土坑墓)を営むもの2例がみられる。屋敷地の北の隅または、北辺の主屋から一番遠い位置にも



第9図 SK08・ST01実測図

設けられていると報告されている。

SK03 (第10図)

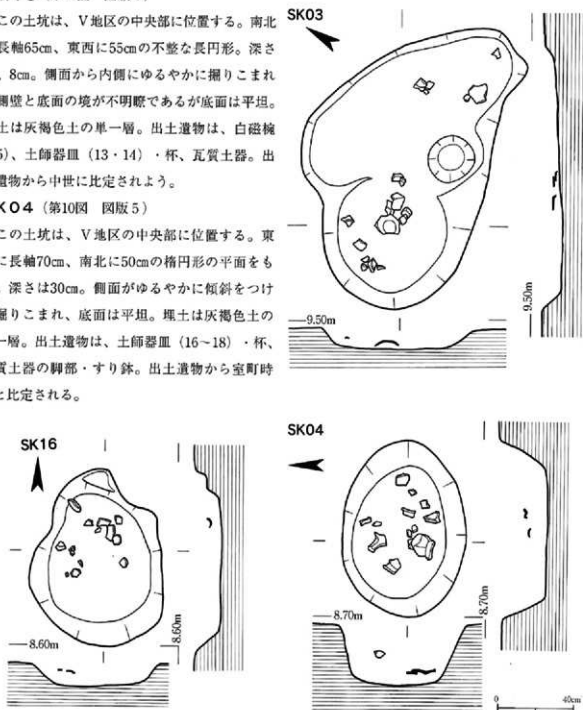
この土坑は、V地区のほぼ中央部に位置し、長軸100cm、短軸70cmの不整な長円形の平面をもつ。深さは、15cm。側面から内側にゆるやかに掘りこまれ、側壁と底面の境が不明瞭であるが底面は平坦。埋土は灰褐色土の単一層。出土遺物は、土師器皿(19)・杯(11)、瓦質土器。出土遺物から室町時代と比定される。

SK16 (第10図 図版4)

この土坑は、V地区の中央部に位置する。南北に長軸65cm、東西に55cmの不整な長円形。深さは、8cm。側面から内側にゆるやかに掘りこまれて側壁と底面の境が不明瞭であるが底面は平坦。埋土は灰褐色土の単一層。出土遺物は、白磁椀(15)、土師器皿(13・14)・杯、瓦質土器。出土遺物から中世に比定されよう。

SK04 (第10図 図版5)

この土坑は、V地区の中央部に位置する。東西に長軸70cm、南北に50cmの楕円形の平面をもつ。深さは30cm。側面がゆるやかに傾斜をつけて掘りこまれ、底面は平坦。埋土は灰褐色土の単一層。出土遺物は、土師器皿(16~18)・杯、瓦質土器の脚部・すり鉢。出土遺物から室町時代と比定される。



第10図 SK03・04・16実測図

SK09 (第11図)

V地区中央部北部に位置する土坑。南北に長軸100cm、短軸60cmの不整な長円形の平面をもつ。深さは45cm。北側の側面は比較的垂直に掘りこまれ、南側は緩やかに傾斜がつき途中から垂直に掘り込まれる。埋土は灰褐色土の一層。出土遺物は、瓦質土器鍋、土師器皿。出土遺物から室町時代に比定される。

SK10 (第11図)

V地区中央部南側に位置する土坑。南北に長軸80cm、東西に短軸70cmの楕円形の平面をもつ。深さは10cm。側面が内側に緩やかに傾斜をつけて掘り込まれ側壁と底面の境が不明確であるが、底面は平坦。埋土は灰褐色土の一層。出土遺物は瓦質土器鍋、土師器皿。出土遺物から室町時代に比定される。

SK13 (第11図)

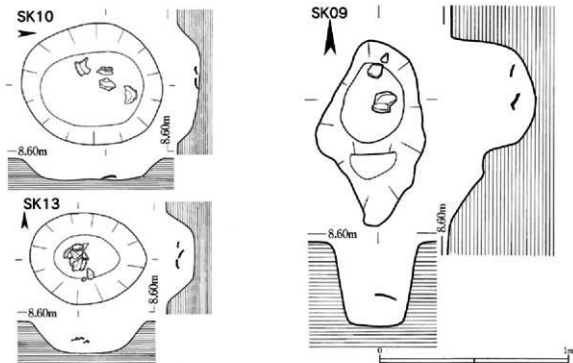
V地区SK11の隣に位置する土坑。東西に長軸65cm、南北に短軸55cmの楕円形の平面をもつ。深さは20cm。側面が内側に緩やかに傾斜をつけて掘り込まれたすり鉢状の土坑。埋土は褐色土の単一層。出土遺物は、口縁端部が尖りぎみの土師器皿・杯、瓦質土器。出土遺物から室町時代に比定される。

SK15 (第5図 図版10)

V地区南側SB16に隣接する(井戸)。上部直径180cmの円形の平面をもつ。底部は長軸140cm、短軸100cm。深さは260cm。出土遺物は少なく、土師器皿、木製の櫛(121)を検出。土師器片から室町時代と比定されよう。SK14に沿うSD06は水を排水する溝と考えられる。

SK11 (第12図)

V地区中央部に、南北に長軸220cm、東西に短軸190cmの不整形の平面をもつ土坑。深さは30cm。埋土は灰褐色の単一層。側面が緩やかに傾斜をつけて掘り込まれ、側壁と底面の境が不明瞭であるが、

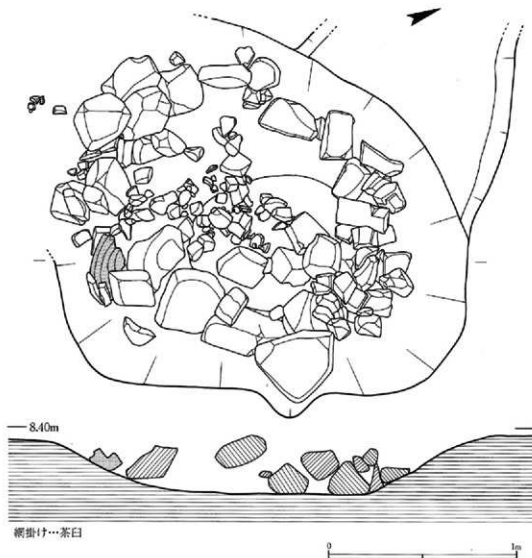


第11図 SK09・10・13実測図

底面は平坦。土坑内には、直径5～60cm程の石が100個以上検出されたが、石組みは施されていない。むしろ、土坑を埋めるために石を投げ込んだと考えられる。石にまじって茶臼（10）や土師器片が検出された。出土遺物から室町時代に比定される。

（3）溝・溝状遺構（第5図）

V地区からは、12条の溝が検出された。流路の方向を見ると9年度と同じく、南北方向に約20°のふれをもつものとそれにほぼ直交する東西方向に流路をとるものが検出された。それらの溝は、出土遺物、建物の棟方向が一致することから、建物を囲む形で造られ、排水及び敷地の区分けをしたものと考えられる。出土遺物は、瓦質土器鍋、土師器、磁器などが出土。出土遺物からこれらの溝は室町時代のものと比定される。



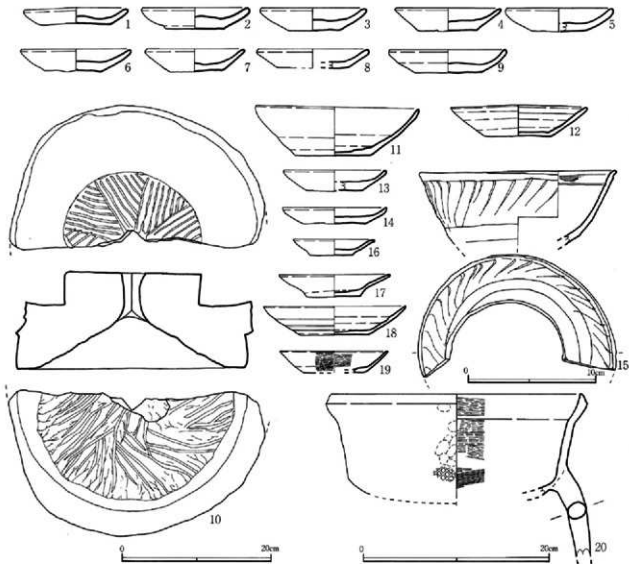
第12図 SK11実測図

Ⅳ 遺 物

平成9年度の東禅寺・黒山遺跡の調査からは、平安時代中頃から室町時代にかけての土器を中心に木器、石器、鉄器などの遺物が出土した。これらの遺物は過去2年間の調査とはほぼ同時代のものであるが、近世の遺物は出土しなかった。以下、遺構ごとに主たる遺物を取り上げる。

SK08出土の遺物 (第13図) 1～9は、土師器皿。体部は肥厚し口縁部は丸く終わる。底部は、糸切り。口径は、8.3～9.3cm、器高1.5～1.9cm。色調は、黄橙色。

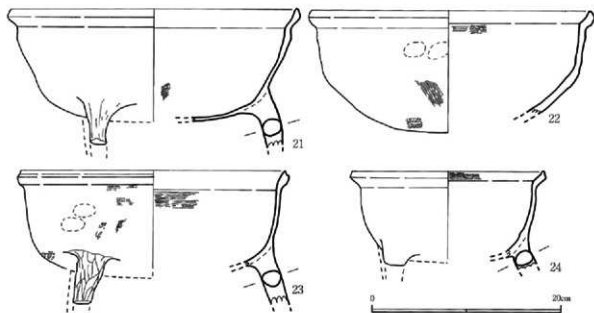
その他のSK出土の遺物 (第13図 図版7) 10はSK11出土の茶臼。白部の摺面は、9分割。断面はV字形。溝は、磨耗。中央部に芯棒を受ける方形の穴。砂岩製。12は、ST01出土の土師器皿。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部糸切り。口径12.8cm、器高3.8cm。色調は、黄橙色。11・19は、SK03出土の土師器皿。11は、体部が直線的に立ち上がり口縁部は丸く終わる。底部糸切り。板目圧痕あり。19は、体部が直線的に立ち上がり口縁端部は細く尖る。底部は糸切り。口径8.4cm、器高1.7cm。色調は、灰白色。13～15は、SK16出土遺物(第13図 図版4)。13は、土師器皿。体部は、直線的に立ち上がり口縁端部は丸く終わる。底部は、糸切り。口径8cm、器高1.7cm。色調は、黄橙色。



第13図 遺物実測図(1)

14は、土師器皿。体部は、直線的に立ち上がり口縁端部は丸い。15は、白磁の碗。体部に「ノ」の字状のヘラ削り模様。口縁端部に釉付着。色調は、灰白色。16～18はS K04出土の土師器皿。16は、体部外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は、細く尖る。底部糸切り。口径6.3cm。器高1.4cm。色調は、灰白色。17は、土師器皿。体部は、外反し細く尖って終わる。底部糸切り。口径8.7cm、器高1.8cm。色調は、灰白色。18は、土師器皿。体部は、直線的に立ち上がり口縁端部は、細く尖る。底部糸切り。口径11.3cm、器高2.3cm。色調は、灰白色。20は、S K04出土の瓦質土器鍋。口縁より胴部にかけてハケ調整、胴部下面は、クシ調整。脚はヘラ削り。外面指頭圧痕。底部に格子状の叩き。口径27.0cm。

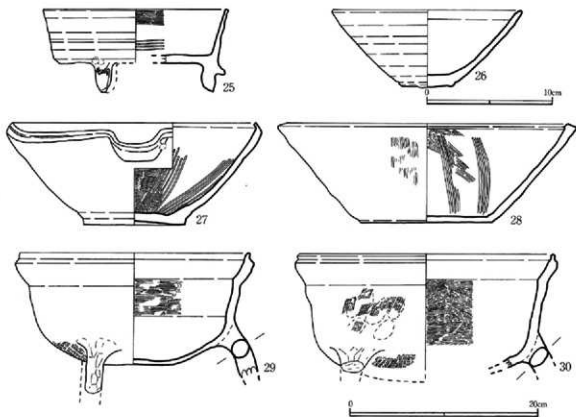
SD出土の遺物 (第14図 図版7) 21～24は、SD01出土の瓦質土器鍋。21は、口縁から胴部にかけてナデ調整。胴部ハケ調整。脚部は、ヘラ削り。口径30cm。22は、瓦質土器鍋。口縁端部は、「く」の字状に屈曲。外面指頭圧痕。底部に斜め格子状の叩き。口径30cm。23は、瓦質土器鍋。口縁から体部にかけて、ハケ後ナデ調整。脚部ヘラ削り。底部に格子状の叩き。口径28cm。24は、瓦質土器鍋。口縁端部は、「く」の字状に屈曲。内面ナデ調整。脚部は、ヘラ削り。口径20.4cm。25～42はSD02出土(第5図 図版7)。25は、獣足の脚をもつ火鉢。脚部を体部に貼り付ける。口縁部は角張る。口径19cm、器高8.8cm。色調は、暗灰色。26は、美濃焼の碗。外面上部から内面にかけて施釉。高台は、削りだし。口径15cm、器高6.2cm。色調は、オリーブ。27は、摺り鉢。内面は、ハケ調整後、6条のクシ描き上げ。口径25.8cm、器高10.9cm。色調は、灰白色。28は、摺り鉢。口縁端部は、肥厚し内側に折り曲げ。内面は、ハケ調整後4条のクシ描き上げ。外面の調整は、ハケ。口径31.8cm、器高10.6cm。色調は、褐灰色。29は、瓦質土器鍋。内面は、口縁から胴部にかけて、ハケ後ナデ調整。脚部は、ヘラ削り。外面ハケ後ナデ調整。口縁部肥厚し「く」の字状に屈曲。底部斜め格子状の叩き。口径24.6cm、器高11.8cm。色調は、褐灰色。30は、瓦質土器鍋。内面ハケ後ナデ調整。底部に格子状叩き。口径27cm。色調は、褐灰色。31は摺り鉢。内面ハケ調整後10条の描き上げ条痕。口径32cm。色調は、暗灰色。32は、摺り鉢。体部は直線的に立ち上がる。内面ハケ調整後6条の描き上げ条痕。口径28cm、器高9.7cm。



第14図 遺物実測図(2)

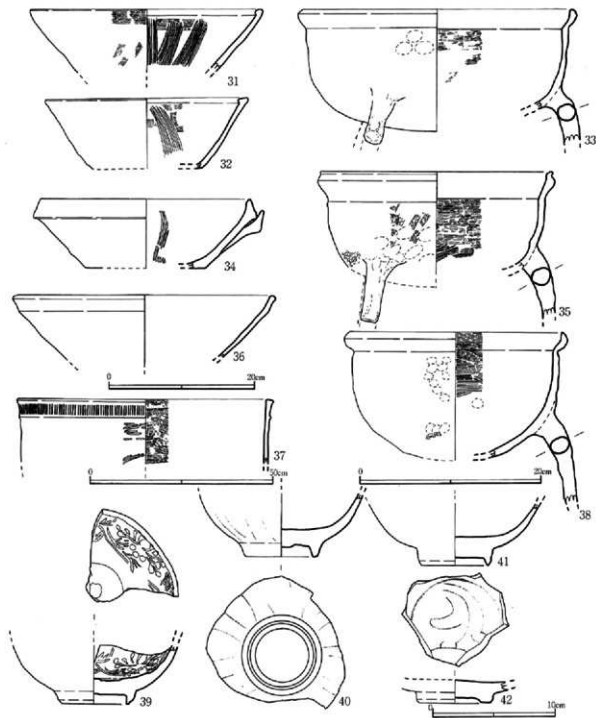
33は、瓦質土器鍋。内面ハケ後ナデ。胴部ハケ調整。脚部はヘラ削り。底部に格子状の叩き。口径30cm。34は、播り鉢。体部は、外反し立ち上がる。内面に6条のクシ描き上げ条痕。口径29cm。35は、瓦質土器鍋。内面は、口縁から胴部にかけてハケ後ナデ。胴部から底部クシ調整。底部に格子状叩き。口径25.2cm。36は、こね鉢。体部は、外反ぎみに立ち上がり、口縁部は内側に折れ丸く終わる。内外面ともにナデ調整。口径35cm。色調青灰色。37は、火鉢。外面上部に印紋、突帯貼り付け。胴部ヘラ磨き。口径56.4cm。38は、瓦質土器鍋。口縁から、胴部にかけてハケ調整。胴部から底部クシ調整。脚部は、ヘラ削り。口径23cm。39は、青磁の碗。断面台形の削り出し高台。内面に花卉の削り出し模様。40は、青磁の碗。内面から、高台内側まで施釉。外面に鎗蓮弁模様。41・42は、青磁の碗。

SP出土の遺物 (図版9) 43~62は、SP02出土の土師器皿。口径は、6.5~12.5cm、器高0.8~2.9cm。体部は、外反ぎみに立ち上がり端部は、薄く尖る。底部糸切り。色調は、灰白色。63~67はSP01出土の土師器皿。口径8.1cm、器高1.4cm。底部は、糸切り。64・68は、SP04出土の土師器皿。底部糸切り。色調は、灰白色。65・70・78は、SP54出土の土師器皿。口径8.1~8.4cm、器高0.8~1.2cm。底部は、糸切り。79~81は、SP06出土の土師器杯。口縁端部は薄く尖る。底部は糸切り。口径18.4cm、器高4.3cm。85は、SP58出土の土師器杯。体部は、外反気味に立ち上がる。底部は、糸切り。板目圧痕あり。色調は、黄橙色。口径15.2cm、器高4.9cm。86・87は、SP44出土の土師器杯。体部は、直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部は、糸切り。色調は、灰白色。88は、SP103出土の瓦質土器鍋。内面ハケ後ナデ調整。胴部ハケ調整。胴部から底部にかけてクシ調整。口径28cm、器高22.3cm。内面は、ハケ後ナデ。胴部はクシ調整。脚部は、ヘラ削り。接胴部に指頭圧痕あり。底部に斜め格子状の叩き。色調は、暗褐色。

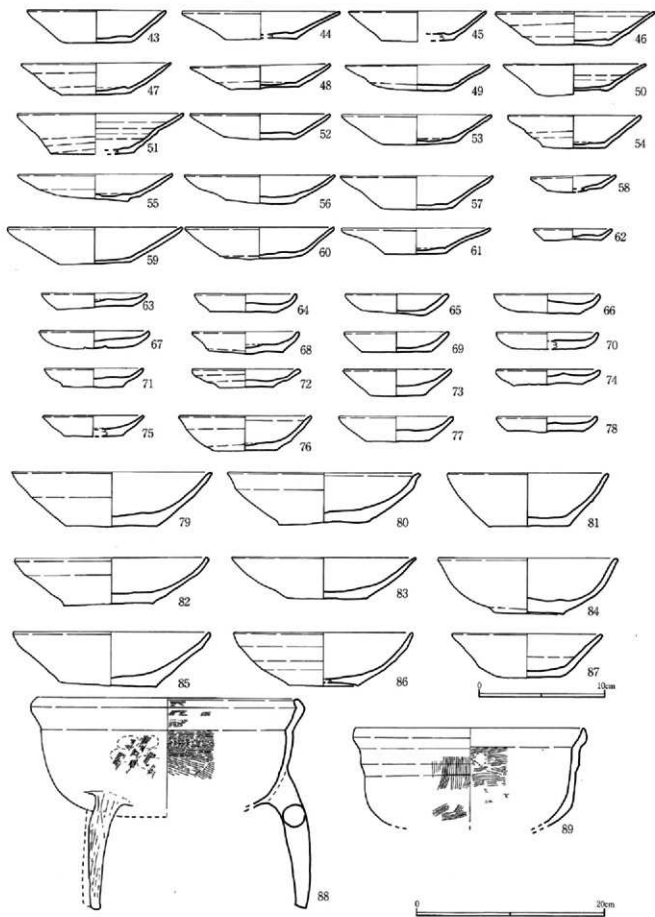


第15図 遺物実測図 (3)

89は、S P 43出土の瓦質土器鍋。口径22cm。口縁端部は、「く」の字状に屈曲。内外面ハケ調整。色調は、褐灰色。90～99は、S P 127出土の土師器皿。口径5.5～6.1cm、器高0.6～0.8cm。底部糸切り。100～105は、S P 87・149・75・08出土の土師器杯。口径8～15.1cm、器高3～4.8cm。106は、S P 109出土の須恵器杯。体部は、直線的に立ち上がり、口縁部は尖る。色調は、青灰色。口径12cm、器高3.7cm。108～111は、S P 45・52・59出土の台付き皿。口径8.8～12.4cm。器高3.7～4.3cm。112～114は、S P 06出土の土師器碗。底部貼付高台。口径16～16.2cm。器高5.2～5.8cm。

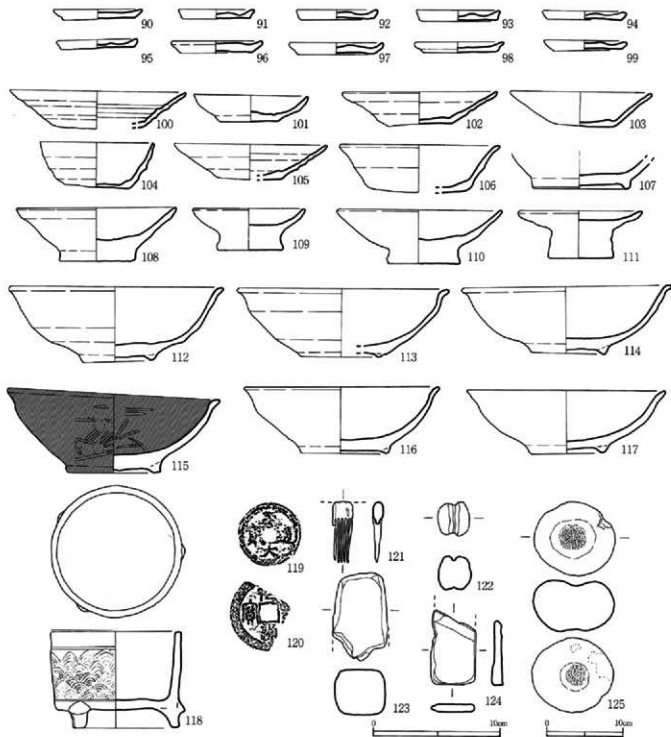


第16図 遺物実測図(4)



第17图 遗物实测图(5)

115は、S P 151出土の黒色土器。内外面にすす付着。体部は、内湾ぎみに立ち上がり口縁端部は外反。底部は貼付高台。口径18cm、器高5.4cm。116・117は、S P 04・57出土の土師器椀。底部糸切り。貼付高台。口径15.2～15.4cm。器高4.3～4.8cm。118は、S P 104出土の香炉。口径10.2cm、器高4.9cm。鼎状の獣足を貼り付ける。内面に爪の痕跡。外面は、波形の印紋。119は、表探。至大通寶(1310年・元)。120は、トレンチから出土。元豊通寶か(1078年・北宋)。121は、S K 16出土の櫛。122は、S D 06出土の土錘。123は、S P 60出土の支脚状土製品。124は、S D 06出土の磁石で凝灰岩製。125は、表探。叩き石。



第18図 遺物実測図(6)

V まとめ

東禪寺・黒山遺跡の発掘調査は平成7・8・9年の3か年が経過した。調査面積は約7,700㎡。掘立柱建物跡55棟、土坑108基、溝状遺構47条、柱穴約4600個の遺構が発見され、多量の遺物が出土した。過去2年間の発掘調査では、平安時代の掘立柱建物群や、るつば、ふいごの羽口、あるいは緑釉陶器、三叉トチンなどの古代に関わる遺物や遺構が数多く検出された。

本年度の調査においては、周防鑄銭司跡や緑釉陶器生産に直接関連するような遺構や遺物は検出されず、室町時代を中心とする中世の遺構・遺物が数多く検出された。以下、中世の遺構・遺物を中心にV地区の性格や特徴について述べてみたい。

中世のまず溝については、V地区の溝状遺構に着目したい。溝12条が掘立柱建物のまわりを縦横に巡っているが、これは湧水が多い土壌の特質から、排水を第一の機能としながらも同時にそれぞれの屋敷地を区画する機能を有していたと考えられる。

掘立柱建物については、建物の規模、棟方向、出土遺物など、ほぼ共通する特徴があり、圍繞する溝と平行な棟方向を示しているものが多い。こうした区画割りをもつあり方は、近隣の土上、鑄銭司大蔵、今宿西遺跡なども共通する。室町期における集落構成の1つのパターンを示すものといえよう。

土師器皿が多量に出土するのも本遺跡の特徴の一つである。家屋を廃絶した後柱を抜き取り、その後土師器皿を意図的に埋めており一種の廃絶儀礼とみなされよう。これも本遺跡を含めた近隣の遺跡と共通するあり方である。

土坑墓について、溝に囲まれた屋敷地内に墓をもうけている例は、土上や今宿遺跡にも見受けられるが、隅丸長方形の土坑墓の内側に粘土を貼りつけている例は認められない。加熱の痕跡や炭の出土さらには、土師器皿の供献的な出土状況などからみて、土坑内で火葬され、そのまま埋葬された可能性も考慮されよう。いずれにせよ注目される事例である。

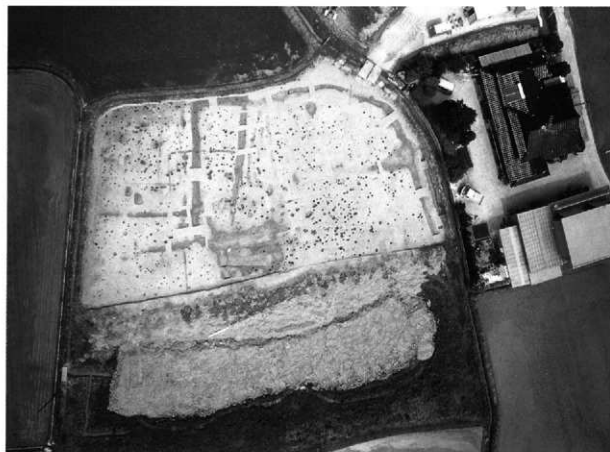
最後に今回の調査では、室町時代の遺構や遺物が主体であったが黒色土器や緑釉陶器片も数点出土しており、周囲に当該期の遺構の埋存が予想される。遺跡の範囲は広大であり、地点を異にして時期的に立地の変遷があったものとみられる。隣接する周防鑄銭司跡との関連性や緑釉陶器の窯跡の追求など、さらに今後の調査に期待したい。

参考文献

山口県文書館編	『防長風土注産案』第4巻小部室町	1983年	マツノ書店
河原純之編	『古代から中世へ』古代史復元10	1980年	講談社
山口市教育委員会	『周防鑄銭司』	1984年	
山口県教育委員会	『土上・鑄銭司大蔵・今宿西』	1984年	
山口県教育委員会	『下右田遺跡』	1978年	
山口県教育委員会	『黒山遺跡』	1995年	



調査区遠景

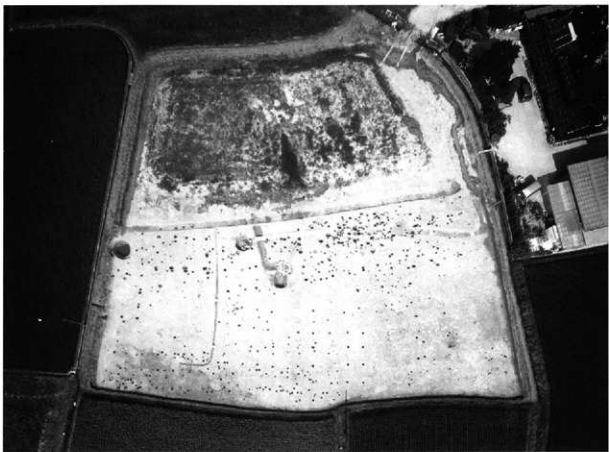


調査区西側

図版2



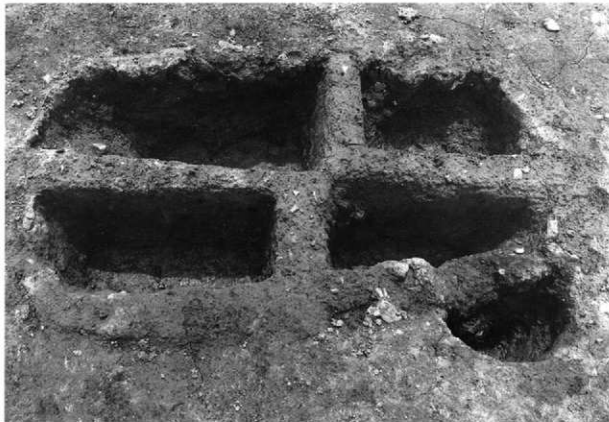
遺跡上空から西を望む



調査区東側



S T01出土状况



S T01

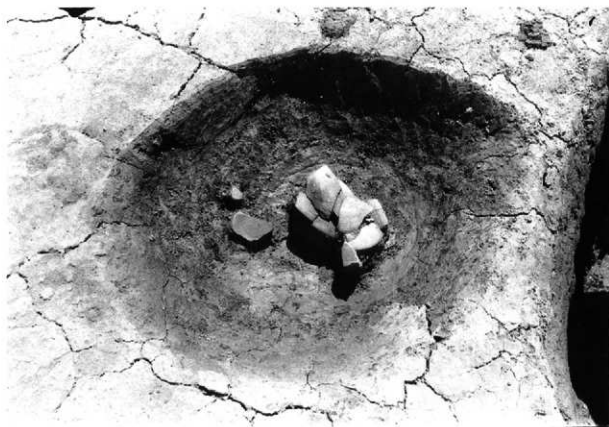
図版4



S K08出土状況



S K16出土状況



S K14出土状況



S K11出土状況

图版6



S P 02 土器出土状况



S P 77 土器出土状况



S P 05 土器出土状况



S P 04 土器出土状况



S P 59 土器出土状况



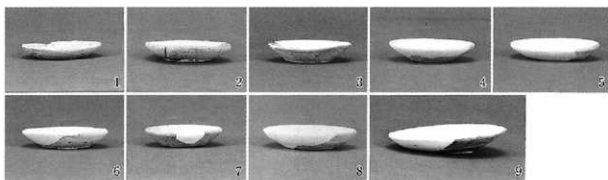
S P 49 土器出土状况



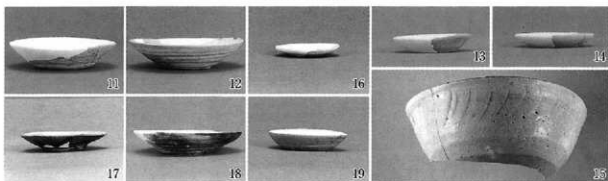
S P 57 土器出土状况



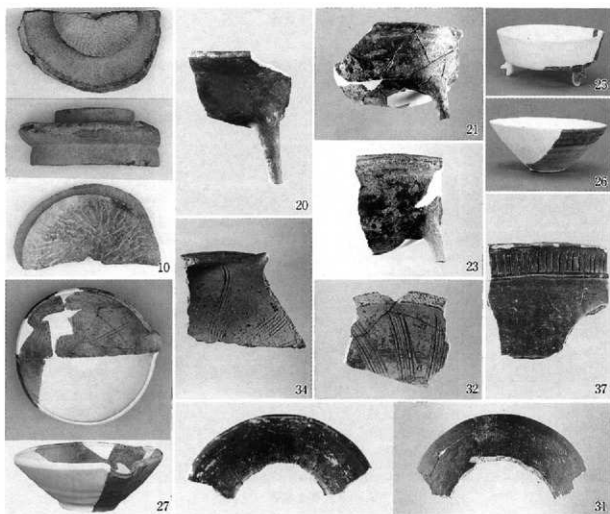
S P 37 土器出土状况



S K08出土遺物

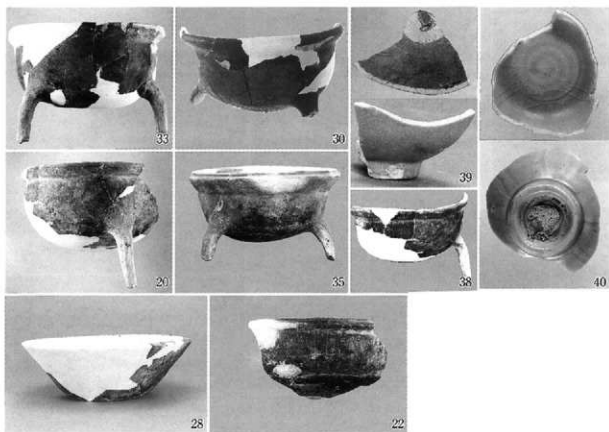


S K出土遺物

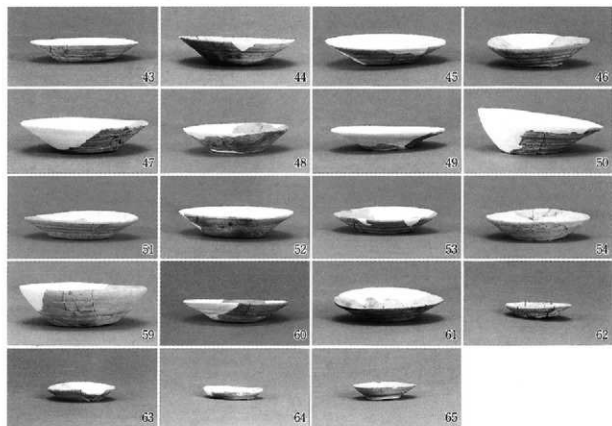


S K・S D出土遺物

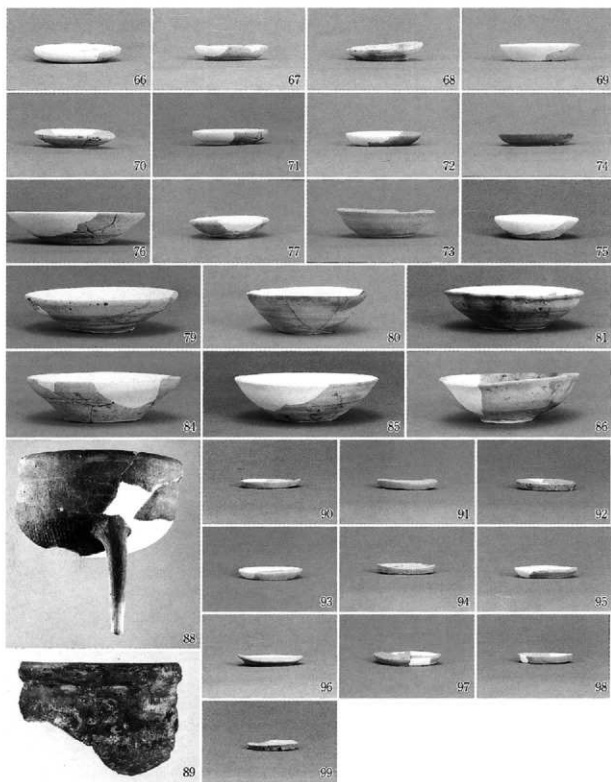
図版 8



S D出土遺物

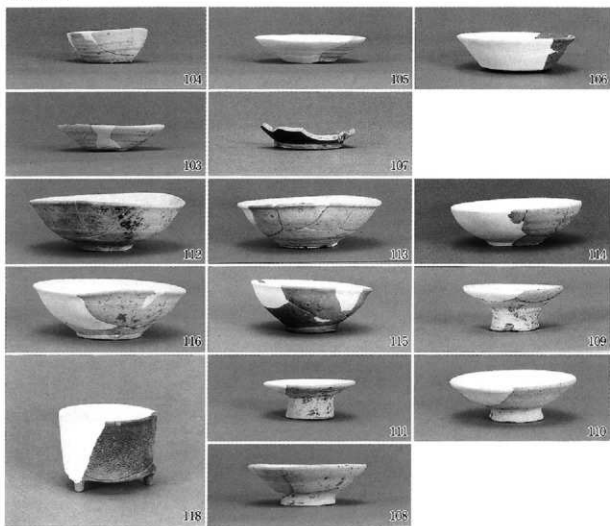


S P出土遺物

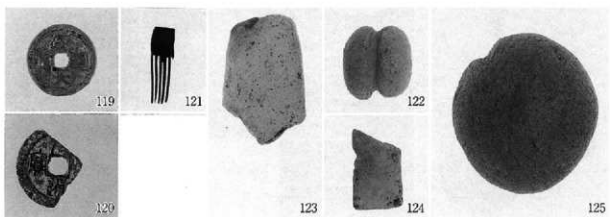


S P 出土遺物

図版10



S P 出土遺物



その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき
書名	東禅寺・黒山遺跡Ⅲ
副書名	平成9年度南若川治水緑地建設事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第6集
編著者名	大石 学 大野真司
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1998年3月20日(平成10年3月20日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうぜんじ 東禅寺・ くろやま 黒山遺跡Ⅲ	やまぐちけんやまぐちし 山口県山口市 おおいぎやま 大字鉦銭司 あさひの 学大門	35203		34°4'36"	131°27'4"	19970506) 19970917	2,200	南若川治水緑地建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡Ⅲ	集落跡	平安～室町	掘立柱建物跡 22棟 柱穴 2,323個 土坑 15基 溝状遺構 12条	瓦質土器、黒色土器、 土師器、須恵器、磁器、 銅、鉄、石器	近隣の土辻・今宿などの遺跡と同時代に営まれた室町時代の集落

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第6集

東禅寺・黒山遺跡Ⅲ

—平成9年度南若川治水緑地事業に伴う発掘調査報告—

1998年3月

編集 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

印刷 株式会社マルニ
(山口市道祖町7番13号)